

本末制度確立過程における寺伝の改竄

——所謂「阿弥陀寺本末圈」諸寺院の場合——

南 尊 融

はじめに

仏教各宗の教団が江戸幕府の宗教政策としての「本末制度」によって統一的に組織化されていったことは周知の事実である。その具体的な施策として、幕府は諸宗の本山に対して末寺の書上げを命じ、これをうけた各宗本山は末寺帳を作成して、寛永九（一六三二）～十年頃にかけて幕府に末寺帳を提出した。⁽¹⁾この末寺帳の作成にあたつては、各宗本山の指令にもとづいて、中小本末圈の本寺や触頭等がその所管の触下・末下各寺の由緒書草案を提出させ、これを触頭・本寺が一括浄書して各寺の住持に署名捺印させること（「本寺改め」）によって出来上がったと考えられている。⁽²⁾そして、この「寛永の本末改め」を最初の契機として本末制度が成立してくるのであつて、それが本格的に確立するのは、幕府が再度各宗本山に「寺院本末帳」の提出を命じた元禄五年（一六九二）を待たなければならぬと考へられている。⁽³⁾

ところが、そのような本末制度が確立する以前においては、中井真孝氏が指摘しているように、本末の関係とい

うものには、かなり流動的な部分があったのである。⁽⁵⁾ すなわち、本末改めの実施による末寺帳の作成に際し、本寺がその各末寺の住持に加判（着帳）させようとしたときに、これを拒否する末寺が現れたということである。この事態に直面した本寺は、解決の場を本山に求めて訴訟を起こし、裁判を仰ぐことになるのである（このような、本寺と末寺との間の訴訟が「本末争論」である）が、その決着の仕方は様々であった。すなわち、その末寺が本寺の支配から離脱して本山の直末となることに成功することあれば、結局本来の本寺との本末関係に甘んずることを余儀なくされる場合もあったのである。

このように本末制度成立の過程において、各宗派で本末争論が起こっていったのであるが、浄土宗教団における本末制度確立過程に関する研究は、中井真孝氏・伊藤唯真氏・宇高良哲氏らの業績が顕著である。⁽⁶⁾ これらのうち中井氏や伊藤氏の研究においては、特に地方の浄土宗諸寺院が知恩院等の本山の下に組織化されていった典型的な例として、近江南部の所謂「阿弥陀寺本末圏」を取り上げて考察している。それによれば、「阿弥陀寺本末圏」は中世末期、近江国栗太郡金勝山の浄厳坊とその麓の草庵から発展した阿弥陀寺を中心として形成され、近江南地域に数百箇寺にも及ぶ末寺を抱えた一大本末圏であった。そして、織田信長の政策によって、この「阿弥陀寺本末圏」の中心は安土城下の浄厳院に移され、「浄厳院本末圏」と称されるようになった。その後、この「浄厳院本末圏」の諸寺院が近世幕藩権力によって知恩院を頂点とする統一的な本末制度の下に組織化されようとすると、元の中心寺院であった阿弥陀寺やそれに準ずる有力寺院が直接の本寺たる浄厳院の支配を拒否して知恩院等の本山の直末寺になることを企て、ついには幕藩権力にその裁定が委ねられるという事態にまで発展したのである。これが「寛永の本末争論」といわれるものであるが、この争論を起こした阿弥陀寺以下の有力寺院は、そのほとんどが結局敗訴し、浄厳院の末寺として組織化されてしまうのである。

ところで、このような浄嚴院本末圈における本末争論において、争論を起こした有力寺院はどのような根拠によつて浄嚴院の支配から離脱しようとしていたのであろうか。例えば阿弥陀寺は、本来の中心寺院としての立場から、浄嚴院と阿弥陀寺は「両本寺」であつて阿弥陀寺は浄嚴院の末寺ではないという主張を持ち出していることについて、従来の研究においては、これを全く文面通りに受け取つて論究されてきた。しかし、論者はこの「両本寺」という根拠については、大きな疑問を抱かざるを得ないのである。すなわち、阿弥陀寺はその寺伝・由緒を改竄することによつて浄嚴院の支配からの離脱を謀つたのではないかと思われるのである。このことを論証しようとするのが本稿の主題である。

一、所謂「阿弥陀寺本末圈」

(一)『湖東三僧伝』に見る「阿弥陀寺本末圈」の成立

そこで、最初に阿弥陀寺と「阿弥陀寺本末圈」の成立の経過を概観しておかねばならない。

既述の如く、中世末期に近江湖南地方に成立した所謂「阿弥陀寺本末圈」は、当時各地において現出していた地方本末圈の最も典型的なものとして知られる。そして、その中心的存在として成立・発展した金勝阿弥陀寺の「開山」から「第三世」住持までの事跡を中心に綴られたのが『湖東三僧伝』(以下『三僧伝』と略す^(?))であることもよく知られている。これによると、阿弥陀寺の「開山」隆堯法印は、応永十一年(一四〇四)金勝山金勝寺の草庵(Ⅱ「浄嚴房」)において念仏三昧に入ったが、そこは女人結界の地であつたので、「応永二十年のころ金勝山の東阪」に庵をむすんで「弘法の道場」とし、「第二世」堯誉隆阿の弟子となつた「第三世」嚴誉宗真は、隆堯が草創

した「東坂の庵を抜き大に殿宇を起し」て「阿弥陀寺と名づけ」、文明十八年（一四八六）にその新仏殿において「不断念仏・六時常行を開白し」、「開山忌」を初めて勤修した。明応元年（一四九二）には「清規」を制定し、その間、長享元年（一四八七）足利義尚の鉤の陣に甥の結城七郎を尋ね、「当山の属院」に火をかけることを中止させた宗真は、義尚の奏聞によつて土御門天皇から「黒衣参内特勅の綸旨を賜り」、翌年「当山へ閭浮檀金の弥陀佛・念佛弘通の綸旨・浄厳宗の号、宸翰の阿弥陀寺の額及び香合を賜」つた。そうして、ついに「門弟千余、子院六宇、属院数百」にも及ぶ、一大本末圏をつくりあげることにつたのである。

以上が『三僧伝』が伝えるところの「阿弥陀寺本末圏」成立の経過の概要である。「浄厳宗」の称号など、いくつかの点に後世の粉飾があることは既に指摘されているが、阿弥陀寺及び「阿弥陀寺本末圏」成立の過程については、この『三僧伝』の既述をほとんど唯一の根拠として語られてきており、これが通説となつていたのである。しかし論者は、この『三僧伝』の記述にはさらに大きな問題点が存在すると考えるのである。

（２）「阿弥陀寺本末圏」の実態

そこで、『三僧伝』に述べるところの内容を検証しなければならぬのであるが、宗真の時代に成立したという「阿弥陀寺本末圏」とは実際にはどのようなものであつたのであろうか。その重要な手がかりとなる史料が「知恩院文書」に残されている。それは、永正十二年（一五一五）十月十六日付の「浄厳坊宗真及び諸末寺住持連署定書写」（仮題⁹）、天文四年（一五三五）九月十三日付「浄厳坊忍普及び諸末寺住持連署定書写」（仮題⁹）、永禄十年（一五六七）三月三日付「諸末寺置目之事写」¹¹の三点の文書（写）である（以下、これら三点の文書はそれぞれ永正・天文・永禄の「連判状」と略す）。これらの文書は、当時の浄厳坊とその有力末寺と思われる諸寺院住持らの

連判による「定書」である。これらの文書の連判のそれぞれの筆頭者である「宗真」「忍普」「応普」には肩書きはないが、後述の如く彼らは阿弥陀寺ではなく、あくまでも「浄厳坊」の住持である（左の〔表Ⅰ〕では便宜上「浄厳坊」とした）。そして、二人目以下の僧侶名にはほとんど「何々寺（院）」と末寺の名が肩書きされており、その最初に阿弥陀寺住持が連署している。これらを寺院ごとに整理すると次の〔表Ⅰ〕のようになる。

〔表Ⅰ〕

寺院名（所在地）*			
〔浄厳坊〕			
寺院名（所在地）*	永正 ^{（一五）} 十一	天文 ^{（五三）} 四	永禄 ^{（五六）} 十
阿弥陀寺（栗・金勝）	宗真	忍普	応普
般舟庵（「本寺ノ寺僧」）*	浄阿	祐真	文普
信楽院（蒲・日野）	真誓		
敬恩寺（栗・金勝）	宗玖		珠養
（「本寺ノ寺僧」）*	臨西		林阿
	周般		
正覚院（蒲・織山）	普阿	珠慶	○（住持名無し）
常楽院（甲・小佐治）	宗阿	善永	
浄光寺（神・奥村）		西圓	宗永
常念寺（野・永原）		観阿	真良
摂取院（蒲・内池）		宗秀	
浄善寺（甲・小佐治）		源阿	宗源

九品寺（甲・下山）

珠源

酉源

称名寺（甲・多喜）

寿清

臨西

弘誓寺（神・野村）

珠栄

宗慶

西願寺（甲・市原）

永源

来迎寺（不明）

善正

如来堂（「組頭ニ而ハ無御座候」）*（不明）

慶阿

東善寺（「組頭ニ而ハ無御座候」）*（不明）

祐春

*所在地の郡名：栗Ⅱ栗太郎、蒲Ⅱ蒲生郡、甲Ⅱ甲賀郡、神Ⅱ神崎郡、野Ⅱ野洲郡

*「本寺ノ寺僧」「組頭ニ而ハ無御座候」の註記は、原文書にはなかったと思われるが、理解の助けになるので表示した。

この表が意味する一つの重要な点は、これらの「連判状」署名の中心人物は浄厳坊の住持であつて、その筆頭末寺としての阿弥陀寺住持は別に存在するということである。この点については後にもう一度詳細に検討するが、ともかくこの「連判状」署名者は浄厳坊とその諸末寺の「組頭」（「末寺頭」）の住持である。ただ、これらの末寺頭の数やその構成には年代によってかなり異なるのであるが、永禄十年までの約五十年間における三通の「連判状」において、二回以上署名している末寺が十一ヶ寺あり、これらは特に有力な末寺であつたと思われる。

このように「阿弥陀寺本末圈」は浄厳坊第三世宗真によつてその基盤が構築され、十六世紀後半には十数箇寺の末寺頭を中心に宗政が運営されていたのであるが¹²、その後織田信長の出現によつて一つの大きな転機を迎える。よく知られているように、天正五年（一五七六）信長は安土城を築いてここに移ると、その直後に浄厳坊第八世応誉明感に命じて、「金勝の坊主」を安土城下に移住させ¹³、旧慈恩寺の寺地を与えて浄厳院を建立した。その結果、「阿

弥陀寺本末圈」の中心は金勝から安土に移り、浄厳院がそれまでの「阿弥陀寺本末圈」の末寺を支配することとなり、ここに「浄厳院本末圈」と称すべき地域的本末圈を形成することになったのである。

二、「浄厳院本末圈」諸寺院の寺伝改竄

(一) 寛永の本末争論おける場合

① 寛永の本末争論

さて、冒頭において述べたように、江戸幕府による「寛永の本末改め」をその最初のきつかけとして「本末争論」が起こっていったのであるが、そのうち「浄厳院本末圈」における寛永年間の争論については、知恩院文書の六号文書（浄厳院末寺公事出入り一件書類¹⁴）によつてその概略を知ることが出来る。そのうち寛永十一年（一六三四）閏七月十日付、京都所司代板倉重宗宛、知恩院役者書状（六号文書 九八）には

一書申上候

一、江州 正覚院

一、同 阿弥陀寺

一、同 常念寺

右三箇寺者江州浄厳院末寺^三而御座候、本寺与末寺公事双方於知恩院遂穿鑿承届、則三箇寺私曲^三申付候處^三少茂下知承引不仕候、然上者向後諸末寺仕置不罷成候、而御所様御朱印之表永代不相背様今度被仰付可被下候、粗言上、

右之外

一、水口 眞光寺^{マツミツ}

一、羽田 光明寺

此貳箇寺^{マツミツ}茂從前々浄嚴院之末寺^ミ而御座候處、近年背小本寺恣ニ在寺仕、浄嚴院致迷惑候、已上、

知恩院

閏七月十日^(寛平二)

役者

板倉周防守殿^(重宗)

御番所

とあつて、正覺院以下五箇寺が浄嚴院と「本末爭論」を起こしていたことがわかる。このうち常念寺を除く四箇寺については、中井真孝氏が綿密に分析しているので爭論の詳細な経過は省略するが、幕府にまで持ち込まれた浄嚴院とその末寺との「公事」(爭論)はどのように決着が付いたのであろうか。まず、正覺院・阿弥陀寺・常念寺の三箇寺は、結局この訴訟には敗れ、その後も浄嚴院末寺の地位に甘んずることになる。⁽¹⁷⁾これに対して、真(心)光寺と光明寺は百万遍知恩寺との間に新たな「契約關係」を持つていたので、浄嚴院の支配からの離脱に成功し、ともに知恩寺の直末となったのである。⁽¹⁸⁾

この事実を踏まえた上で、先にも指摘したように、これらの末寺のうち阿弥陀寺の成立・発展の経過や寛永の爭論における動向については再検討する必要がある。また、常念寺については従来の研究では全く扱われてこなかったのであるが、本稿の主題に対して重要な示唆を与えてくれる点があるので、これを新たに検討することとする。

②阿弥陀寺の寺伝改竄

そこで先ず阿弥陀寺についてであるが、阿弥陀寺と浄厳院との争論は、知恩院文書の寛永十一年（一六三四）五月六日付、知恩院役者中宛、浄厳院深普書状（六号文書 九四¹⁹）によると、「阿弥陀寺不謂たくミを仕、企邪儀を候て、浄厳院与阿弥陀寺者阿本寺ニ而候間、諸末寺並ニ着帳仕間敷由申、着帳不仕候」といつて「前代未聞之新儀」を申し立ててきたので、浄厳院は「阿弥陀寺儀者浄厳院之末寺たる事、実正明白」である理由を八箇条にわたつて列記し、本山知恩院の裁許を求めている。そして、年欠であるが同じく寛永十一年のものとと思われる五月廿三日付、知恩院役者宛、深普書状（六号文書 一一三²⁰）には、「阿弥陀寺ハ浄厳院末寺ニ落着仕候」とあるので、五月六日付の浄厳院からの訴えに対して知恩院の裁定が一旦下されたようである。ところが、この裁定に対して阿弥陀寺は「何共不致落着」といつて再び「着帳加判」を拒んでいるので、再度知恩院から「御折帋」を下してほしい、と浄厳院が要請している。

その後、この争論は少なくとも正保二年（一六四五）まで続いたことが知られるが、既述の如く、阿弥陀寺は結局この争論に敗訴し、浄厳院の末寺として留まることとなったのである（註17参照）。

さて、このように寛永の本末争論に敗れた阿弥陀寺について、その寺伝・由緒の改竄が行われたのではないかという仮説を冒頭に掲げたのであるが、その点についてここで具体的に検証してみよう。

阿弥陀寺の成立に関しては、既に見たように隆堯が金勝山麓の東坂に結んだ草庵を、宗真が拡大・発展させたものが阿弥陀寺であった。そして、その歴代は第八世応普明感までが浄厳坊（のち浄厳院）と共通した住持となつていた、というのが阿弥陀寺の歴代住持についての『湖東三僧伝』に基づくところの通説である。そして、浄厳院に伝わる「元禄五申年九月十五日之改帳・同六年酉九月晦日公儀江上候扣帳」（以下「元禄五年改帳」と略す）には「隆堯法印造立²¹」とされ、またこれとほとんど同じころに作成された『浄土宗寺院由緒書』には「開山隆堯法印」

と記されており（註4・17参照）、『三僧伝』の記事と一致するのである。

ところが、『三僧伝』や元禄年間の由緒書類において、阿弥陀寺の開山を隆堯としていることについては甚だ疑問があるのである。実は『三僧伝』自身が語っているとおり、「東坂の庵」を本格的な寺院の体裁に整えたのは宗真なのであり、その意味においても阿弥陀寺の開山はあくまで宗真であつたと考えられるのである。このことを明確に示している史料が、知恩院文書の寛永十二年（一六三五）六月六日付、浄厳院深誉の「本末代々ノ覚」（六号文書 一〇一）である。これによれば、まず本寺浄厳院（坊）の住持を「開山隆堯法印」から「十代広誉鉄牛上人」まで列記し、その次に、

浄厳院末寺阿弥陀寺開基者、	同	五代文誉真智大徳
本寺三代住持嚴誉宗真上人	同	六代真誉珠養大徳
阿弥陀寺二代宗誉浄阿上人	同	七代宝誉正琳大徳
同 三代観誉祐真大徳	同	八代行誉浄運大徳
同 四代興誉宗隆大徳	同	九代長誉勢把上人

と記されている。これらの阿弥陀寺住持のうち、二代「浄阿」・三代「祐真」・五代「文誉」は、それぞれ先にあげた知恩院文書の永正・天文・永禄の「連判状」（表Ⅰ）によつて確認できる。ただ、「本末代々ノ覚」は、寛永の本末争論において、浄厳院側から提出された文書であるので、その信憑性に若干の問題なしとしないのであるが、ところが、阿弥陀寺に所在する宗真の墓塔（無縫塔）には「富谷山開祖・嚴譽上人大和尚」と刻銘されてお⁽²³⁾り、「本末代々ノ覚」の記載と一致するのである。

このように、阿弥陀寺の開山は隆堯ではなく嚴誉宗真であることは疑う余地が無く、少なくとも十七世紀中頃ま

では阿弥陀寺自身においてはそのように認識されていたことは明らかであり、二代目以降の歴代も浄厳坊とは全く別の住持であつたのである。従つて、所謂「阿弥陀寺本末圈」⁽²⁴⁾は、その宗政が実質的には阿弥陀寺を中心におこなわれていたにしても（この点についても検討の余地があるが、今は取り敢えず通説に従つておく）、形式上はあくまで浄厳坊が本寺として存在し、阿弥陀寺はその末寺であつたのである。このような理由から、「阿弥陀寺本末圈」という呼称は不適當であり、論者はこれを「浄厳坊本末圈」と呼ぶべきである⁽²⁵⁾と考えるのである。

ところが、その後隆堯法印を阿弥陀寺の開山とし、その三代に宗真を据え、さらに四代以降八代応誉明感が安土に移るまでの間、浄厳坊の住持が同時に阿弥陀寺の住持でもあつたということに書き替えられてしまつたと考えられるのである。

③常念寺の寺伝改竄

このような寺伝・由緒の改竄は、常念寺においても行われていたと思われる。野洲郡永原の常念寺は、既述の天文と永禄の「連判状」（表Ⅰ）にその名が見えており、「浄厳坊本末圈」（所謂「阿弥陀寺本末圈」）の有力末寺の一つであつたことが確認できる。この常念寺の由緒を伝える現存最古の記録は、先に若干引用した「元禄五年改帳」である。これには

（浄厳院）
同末寺

（近江国）
同国野洲郡永原村

一、御朱印寺領五石

明鏡山常念寺

式百九拾七年己前応永三丁丑^マ中

念蓮社常誉真厳和尚草創⁽²⁶⁾

とある。

一方、常念寺に伝わる文書のうち由緒を記したものとては、宝永二年（一七〇五）に寺社奉行に差し出された「乍恐常念寺代々書付奉差上ヶ候」（以下「代々書付」と略す）と題する文書が最古で、それには

一、常念寺開山然蓮社常譽真嚴上人、三百拾年以前、應永三_丁丑_マ年中草創、其後、永正三丙寅年、永原越前守開基建立、（以下略）

とある。これらの史料に従えば、応永の初め（三年＝一三九六。「丁丑」は四年）に常譽真嚴（または真嚴）によつて草創され、その後、永正三年（一五〇六）にこの地の領主永原越前守⁽²⁾によつて本格的に堂舎が整えられたといふことになる。

ところで、常念寺の歴代住持について、右の「代々書付」に、

二世	臺蓮社蓮譽上人	十二世	教蓮社大譽上人
三世	眞蓮社西譽上人	十三世	聲蓮社念譽上人
四世	極蓮社證譽上人	十四世	眞蓮社圓譽上人
五世	忠蓮社良譽上人	十五世	然蓮社廓譽上人
六世	大蓮社恩譽上人	十六世	横蓮社超譽上人
七世	實蓮社忠譽上人	十七世	天蓮社鏡譽上人
八世	心蓮社安譽上人	十八世	本蓮社誓譽上人
九世	生蓮社長譽上人	十九世	玄蓮社照譽上人
十世	照蓮社眞譽上人	廿世	然蓮社卓譽上人

十一世 莊蓮社嚴誓上人

廿一世 秀蓮社梅誓上人

とある。このうち「二世 臺蓮社蓮誓」については、寛延三年（一七五〇）に序を記す常念寺の過去帳に「二 臺蓮社蓮誓上人華朴觀阿大和尚 十一月朔日」とあるのと同じである。この「二世 觀阿」の名は知恩院文書の「天文の連判状」に「常念寺 觀阿 判」とあり（表Ⅰ）、觀阿は常念寺住持職として実在したことが確認できる。そして、三世から二十一世梅誓（元禄年間頃）に至る歴代住持についても検討してみると、かなり事実を伝えていると考えられる。⁽²⁸⁾

このように常念寺の歴代住持の名は概ね事実であることが確認できるわけであるが、ここで一つ大きな問題点がある。それは、先に見たように元禄・宝永年間に記された寺伝において、応永三年に「常誓真嚴（嚴）」が常念寺を開いたとしていたことと、二世觀阿が天文年間に実在していたことである。すなわち、開山の応永年間から二世の天文年間までは百五十年近くも隔たっており、全くつじつまが合わないのである。

そこで、この疑問を解くと思われるものが、現在常念寺の境内墓地に存在する「宗真上人 戊子十二廿九」（戊子）の「子」は「寅」の異体字）と刻銘のある一石五輪塔である。⁽²⁹⁾ここに名前の彫られた「宗真上人」とは、浄嚴坊第三世宗真のことと思われ、「戊子十二廿九」の日付も宗真の寂年月日、永正十五年（＝戊寅）十二月二十九日（三僧伝⁽³⁰⁾）と一致する。すなわち、この一石五輪塔は浄嚴坊宗真の供養塔であることが判明するのである。

では、何故に宗真の供養塔が常念寺に存在するのであろうか。この点については、先に見たように宝永二年の「代々書付」に「其後、永正三丙寅年、永原越前守開基建立」とあったことが重要なヒントとなる。すなわち、永正三年という年代は宗真が在世していた年代であるから、常念寺がその後天文年間以降において浄嚴坊の有力末寺であったという事実と、宗真の供養塔が常念寺に存在するということを考え合わせると、永正三年に永原氏の経

済の援助によつて本格的な堂舎を整えたといふそのときの常念寺住持は、実はこの宗真その人であつたと考えられるのである。そうであるとするならば、宗真が入寂した永正十五年（一五一八）から第二世観阿の實在が確認できる天文四年（一五三五）までは十七年の差であるから、宗真を常念寺の開山と考えると年代的に丁度符合するのであり、「常誓真嚴（嚴）」を開山とした場合の応永年間との差が百五十年もあつた矛盾が一挙に解消するのである。すなわち、現在の常念寺の住職は第四十二世を数えるが、この代数は、以上の考察によつて、十六世紀初頭（寺伝によれば永正三年）に宗真を初代（開山）として数えられていると考えられるのである。すなわち、常念寺に所在する「宗真上人供養塔」は、常念寺の「開山塔」として祀られていることが判明するのである。

ところが、寺伝では開山僧を「常誓真嚴（嚴）」とし、これを初代に数えて二世観阿以降の歴代住持をあげており、しかもそれ以降の歴代中にも宗真の名を見いだすことはできない。宗真を開山とすることが正しいならば、既述の如く第二世観阿以降の歴代はかなり事実を伝えていると考えられるので、常念寺歴代住持は宗真のみがその名を伝えていないことになる。すなわち、開山である宗真は何らかの理由によつて常念寺歴代からその名を消され、それに代わつて「常誓真嚴（嚴）」なる僧が開山として伝えられているのである。⁽¹¹⁾

では、いかなる理由によつて宗真の名が消されたのであろうか。その重要な手掛かりとなるのが、先にも挙げた「代々書付」の記述である。それには、「開山」「常誓真嚴」による応永三年の「草創」と永正三年の永原越前守による「開基建立」を述べたあとに続いて、

天正八辰十月、織田信長公蒲生郡豊浦江寺ヲ御引被為成候、同十午年豊浦江永原江立歸り、同十三乙酉當寺諸方且那之以助成建立仕候御事、（中略）浄嚴院末寺と申候旨趣ハ、此安土浄嚴院ハ織田信長公御取立之寺ニ御座候故、信長公以御威光、右之時末寺ニ被為成候也、其訳ニ付、常念寺本堂ヲ一度安土近所江御引被為成候得共、中

一年差置、又永原江立帰り、右之通諸旦那として建立相統仕、

とある。これによれば、織田信長による浄厳坊の安土への移転（＝浄厳院の成立）の直後、常念寺は一時安土の城下に移されていたことが知られるのである。³²⁾

しかし、この記述には一つ大きな問題点がある。それは、常念寺は信長の「御威光」によって、この安土移転の時に初めて浄厳院の末寺になったとしていることである。事実としては、既に見たように常念寺は永正年間頃に宗真によって開かれたと考えられ、遅くとも天文年間（第二世観阿の時）には浄厳坊の有力末寺となっていたのである。その後永禄年間においても同様であったのである。にもかかわらず右のような記述がされているということは、安土へ一時移転した天正年間（一五八〇年代）から「代々書付」が書かれた宝永二年（一七〇五）までの間に、常念寺の由緒が書き替えられたということが判明するのである。そして、常念寺の開山である浄厳坊宗真のみが常念寺の歴代からその名を消されているということも考え合わせると、このような常念寺の由緒改竄は、浄厳坊（院）と常念寺との本来の密接な関係を否定することを目的として行われたと考えざるを得ないのである。

③阿弥陀寺と常念寺の寺伝改竄の理由

以上見てきたように、寛永の本末争論で本寺浄厳院と争った阿弥陀寺や常念寺は、十六世紀においては共に浄厳坊の有力な末寺であったのであるが、その後、それぞれの寺伝・由緒が書き替えられたということが明らかとなったのである。そして、書き替えられた内容は、両寺共に浄厳院の末寺ではない（または、本来末寺ではなかった）ということを示そうとしているのである。この共通点から導き出されることは、まさに両寺が浄厳院と確執のあった寛永年間の争論時にこのような寺伝の改竄が行われたのではないかということである。すなわち阿弥陀寺の場合は、浄厳院と「両本寺」であるという主張³³⁾を正当化するために、浄厳坊が安土に移るまでの歴代住持と阿弥陀寺の

それとは同じであつたのである、ということを示そうとして書き替えられたと考えられるのである。⁽³⁴⁾「浄厳坊本末圏」は、阿弥陀寺がその中心であつたという認識が定着してしまい、「阿弥陀寺本末圏」という呼称が出来上がったと思われるのである。また常念寺の場合は、浄厳坊宗真が常念寺の開山であるという事実を隠蔽することにより、常念寺は本来は浄厳坊（院）とは直接には無関係の寺院であるということを殊更に示すことによつて、浄厳院からの自立を企てようとしたのであつたと思われる。⁽³⁵⁾

(2) 「本寺替え」が行われた場合

一方、本寺と争つてその支配から離脱したわけではないが、他の本寺との間に本末関係を新たに結んだ「本寺替え」が行われた場合においても寺伝の改竄が行われたと考えられる例がある。それが蒲生郡日野の信楽院である。

信楽院は、室町・戦国期に日野の領主であつた蒲生氏によつて建立されたと伝えられている。その寺伝によると、蒲生郡内池村にあつた堂宇を、文明六年（一四七四）に蒲生貞秀入道智閑がその居城音羽城に移し、厳誉宗真を請じて中興開山とし、仏智山信楽院と号したのに始まるという。蒲生智閑と宗真とが実際に密接な関係を持つていたことは、文明十六年（一四八四）に宗真が願主となつて知恩院御影堂の本尊法然上人座像の修復が行われたとき、その資財を提供したのが蒲生智閑であつたという事実によつて確認できる。⁽³⁷⁾そして、その後も信楽院は「浄厳坊本末圏」の有力な末寺であつたことが知恩院文書の永正と永禄の「連判状」によつて確認できる（表Ⅰ）。このうち、永正十二年の「宗玖」は、宗真の跡を継いで浄厳坊第四世となつた「映普宗玖」であつて、このとき宗玖は信楽院の第二世であつたことが「信楽院世代」⁽³⁸⁾によつて知られる。その後信楽院は、蒲生智閑の孫定秀が中野城（日野城）を築いたとき、音羽城から移したといわれる。⁽³⁹⁾中野城へ移転した後の信楽院の住持は「永禄の連判状」に

「珠養」とあることで確認できる（表一）⁽⁴⁰⁾。このように、宗真を中興開山とする信楽院は、十六世紀の中頃までは浄嚴坊の有力な末寺の一つであつたことがわかる。

その後、定秀の孫氏郷は豊臣政権下の大名として伊勢松坂、さらに会津若松へと領地替えとなり、その結果、蒲生氏の菩提寺信楽院はしだいに衰退していった。そこで、地元有志が会津城主蒲生秀行（氏郷の子）に掛けあい、信楽院を再興することとなつた（慶長元年＝一五九六）。ところが、このときから信楽院は百万遍知恩寺の末寺となつたのである。当時、蒲生郡は水口城主長束正家の領するところであつたので、信楽院再興を正家にも依頼したが、正家は知恩寺三十二世奉誉聖伝と「親縁」であつたので、その関係から信楽院の再興は浄嚴院ではなく知恩寺の「預り寺」となることで実現したのである。⁽⁴¹⁾

こうして、近世に入つて知恩寺の末寺として存続することになつた信楽院は、『由緒書』には、次のように記されている。

江州蒲生郡日野町 佛智山信楽院

一、起立者明應七戊午年、蒲生左京大輔貞秀及晩年落髮、一字建立隱居、法名大貳法眼智閑大德號、于時永正十一甲戌年三月五日逝、行年七十一、從斯已下蒲生貞秀第六代主飛彈守氏郷、天正八年六月勢州移城、其時父左兵衛大輔堅秀、⁽⁴²⁾法名天英惠倫大德號、信楽院止住、惠倫逝去後、氏郷下知始令僧住持也、

一、寺門中興 清蓮社盛譽上人

一、姓氏・生所・剃髮等 不知、

一、遷化 慶長十三年六月廿一日、行年不知⁽⁴³⁾、

この文面で注目すべきことは、まず、信楽院の起立が蒲生貞秀（智閑）であることは先に見た寺伝と一致する

(年代の不一致は、この場合あまり問題とはならないであろう) が、このときの開山僧の名が示されていないことである。本来、元禄八年頃から一斉にまとめられた『由緒書』に記載すべき最も重要な項目は、宇高良哲氏が述べているように、それぞれの寺院の開山の由緒や行状であつたはずである。⁽⁴³⁾ 実際に、『由緒書』の他の寺院の項目を一覧すると、ほとんど例外なく開山僧の名を記すか、不明な場合は「起立・開山不知」と書かれている。ところが、信楽院の場合は、起立の蒲生氏についてはかなり詳しく記しているにもかかわらず、開山については一言も触れられていないのである。先に見たとおり、信楽院はその成立から約百年間は浄厳坊の有力な末寺として存在したことが明らかであるにもかかわらず、その点については全く記されていないのである。そして、知恩寺の末寺として再興したときの住持「清蓮社盛誉」(「信楽院世代」の四世) が「寺門中興」の僧としてあげられており、この盛誉を事実上の開山として、その略歴が記されているのである。

これらのことは何を意味するかというと、『由緒書』が書かれた元禄当時、信楽院は知恩寺の末寺となつていたことにより、その事実が発生した以前の本末関係を示す由緒が消されたということである。蒲生氏との関わり自体は本末関係と直接には関係がないので、智閑による起立を初めとする蒲生氏との関係については記されたが、知恩院を本寺とする浄厳院(坊)に関係のある事実は消されてしまったと考えられるのである。⁽⁴⁴⁾

おわりに

「浄厳坊(院) 本末圈」の有力末寺であつた阿弥陀寺や常念寺の中世末期から近世初期における動向を検証することによって、寛永の本末争論をきっかけに、これらの寺院の由緒が書き替えられてしまったことを明らかにした。

また、信楽院の場合のように、いわば平穩に本末関係の改変がおこなわれた場合でも由緒の書き替えがおこなわれたのであった。このような寺伝の改竄は、近世幕藩体制確立期に実施された本末改めを主な契機として、地方の有力な寺院においては、かなり一般的におこなわれていたのではないだろうか。すなわち、本末制度の成立過程において、ある寺院とその本寺との本末関係が改変されようとしたとき、あるいは改変されてしまうと（その改変が恣意的であるか否とにかかわらず）、もとの本寺と関係のある寺伝・由緒は書き替えられてしまう（少なくとも公的な文書においては）ということである。そうであるとするならば、本稿で検証した以外の寺院においても、このことを念頭に置いて寺伝・由緒を検討していけば、それぞれの寺院の成立・発展の過程や本末関係の変遷等を明らかにすることが出来るのではないだろうか。⁽⁴⁵⁾

註

- (1) 圭室文雄『日本仏教史 近世』（一九八七年 吉川弘文館）五二頁。
- (2) 竹田聰洲『蓮門精舎旧詞の史料批判補説』（竹田聰洲著作集第二巻『民俗仏教と祖先信仰（下）』へ一九九四年 国書刊行会 六三五頁）、宇高良哲『浄土宗寺院由緒書 解題』（『増上寺史料集』第七巻 一五二五頁）。但し、これは元禄年間に作成された『浄土宗寺院由緒書』（『増上寺史料集』第五・六・七巻）の成立過程についての考察であるが、寛永の本末帳についても基本的には同様な方法で作成されたと考えてよいであろう。
- (3) 『宗教制度調査資料』第拾巻輯「寺院本末関係」（大正十二年三月調）のなかで、浄土宗の「本末関係ノ確立」は「寛永十年ノ本末帖作成以後ト見ルヘシ」としている（同書 二七〜二八頁）。

(4) 圭室文雄『日本仏教史 近世』四三頁。この元禄五年の寺社奉行からの命を受けて作成されたものが『浄土宗寺院由緒書』(元禄八十年頃成立。以下『由緒書』と略す。)であり(宇高良哲「寺院由緒書 解題」一五一八頁)、その抄写本が『蓮門精舎旧詞』(『続浄土宗全書』第十八・十九卷)である(註2参照)。

(5) 中井真孝「浄土宗の本末関係」(『法然伝と浄土宗史の研究』一九九四年 思文閣)二五九～二六〇頁。

(6) 中井真孝「浄土宗の本末関係」、同「知恩院の京都門中について」他(『法然伝と浄土宗史の研究』)。伊藤唯真「一般寺院の成立事情―近江の場合」(伊藤唯真著作集Ⅱ『聖仏教史の研究 下』一九九五年 法蔵館)、同「浄土宗近世教団の胎動」(同著作集Ⅳ『浄土宗史の研究』一九九六年)他。宇高良哲『近世関東仏教教団史の研究』(一九九一年 文化書院)。

(7) 『浄土宗全書』第十七卷 六一六～六二五頁。

(8) 「浄厳宗」の称号については、伊藤唯真氏が「阿弥陀寺の門流を誇るため、後世に言い出した称であろう」(「知恩院周普珠琳と浄厳坊宗真―珠琳の一書状をめぐって―」『浄土宗史の研究』二五五頁)と述べている。

(9) 知恩院文書 六号文書 一〇〇―六。

(10) 同前 一〇〇―七。

(11) 同前 一〇〇―八。以上三点の文書の全文は、中井真孝「浄土宗の本末関係」(前掲書)二七六～二七八頁に掲載。

(12) 中井真孝「浄土宗の本末関係」(前掲書)二六二頁、同「知恩院の京都門中について」(同書)二八一頁。

(13) よく知られているように、この時の織田信長朱印状が浄厳院に残されている。

(金勝)

こんせの坊主寺領事、昨日如申聞、可相渡之儀、自余之坊主も此方へ越候ハ、可遣候、無左候ハ、皆可為欠所候、

成其意可申付事專一候也

十月十日

(朱印) (印文「天下布武」)

(捺封ウワ書)「(墨引)」

長谷河 (秀一) 竹とのへ

野々村三十郎とのへ (正徳) 信 (織田信長)

(『企画展』隆堯法印と阿弥陀寺・浄厳院)へ一九九一年 栗東歴史民俗博物館へ七頁図版)

- (14) 冊子を含めて通番七六号から一一三号まで、合わせて三十八点の文書。「表一」に示した三通の「連判状」(写)もこれに含まれる。

- (15) 正覚院は、知恩院文書の三通の「連判状」において、阿弥陀寺を除いて、唯一、三通ともに「末寺頭」としてその名が見えており(表一)参照。但し、「永禄の連判状」には住持名は記されていない。浄厳坊の最も有力な末寺の一つであった。

- (16) 中井真孝「寛永の末寺改め」「本寺への『出仕』」(『法然伝と浄土宗史の研究』)二六三―二六七頁。

- (17) 三箇寺とも『由緒書』(『増上寺史料集』第七卷)に浄厳院末として記されている(正覚院 一一六九頁、阿弥陀寺 一一七八頁、常念寺 一一七三頁)。なお、この三箇寺のうち正覚院と阿弥陀寺については、この訴訟は少なくとも正保二年(一六四五)まで続いたことが『浄厳院文書』B二二・二六(『安土城・織田信長関連文書調査報告四 摺見寺文書目録II・浄厳院文書目録』へ一九九五年 滋賀県教育委員会)七五頁)によって知られる。また、常念寺については訴訟がいつ終結したかは不明だが、知恩院文書中にこの争論に直接関係するものが数点あり、他の有力末寺と同様な争いをしていたことがわかる。

- (18) 中井真孝「浄土宗の本末関係」(前掲書)二六五頁。両寺とも『由緒書』には知恩寺の末寺としてあげられている(『増上寺史料集』第五巻 一四八頁)。

本末制度確立過程における寺伝の改竄——所謂「阿弥陀寺本末圈」諸寺院の場合——

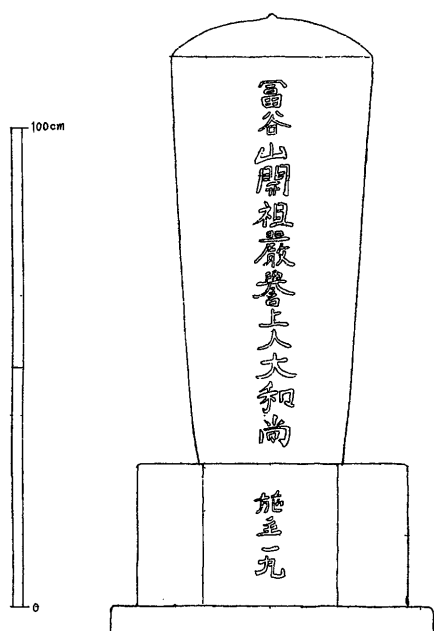
(19) 全文は、中井真孝「浄土宗の本末関係」(前掲書)二七二〜二七四頁に掲載。

(20) 全文は、同前 二七五〜二七六頁に掲載。中井真孝氏はこの文書を寛永十二年のものと推定しているが、その内容から論者は十一年と考える。

(21) 「浄厳院文書」D七(『摠見寺文書目録II・浄厳院文書目録』八八頁)。

(22) よく知られているとおり、二代堯誉隆阿・三代嚴誉宗真・四代映誉宗玖・五代忍誉真源・六代仙誉珠慶・七代九誉源慶(ここまでが「浄厳坊何代」と記す)・八代応誉明感(以下「浄厳院何代」とつづき、九代磨誉了念・十代広誉鉄牛まで記されている)。

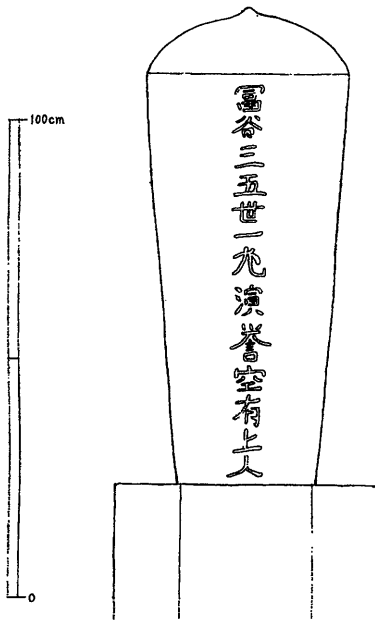
(23) 金勝 阿弥陀寺 嚴誉宗真墓塔 (二〇〇四・三・二三実測)



『企画展』隆堯法印と阿弥陀寺・浄厳院』四九頁「嚴誓宗真墓」解説文にも記されている通り、「富谷山」は阿弥陀寺の本来の山号である。寛政六年（一七九四）に書かれた『湖東三僧伝』の内題に「近江金勝山阿弥陀寺三僧略傳」（『隆堯法印と阿弥陀寺・浄厳院』二二頁図版）と記しているが、『由緒書』では「富谷山阿彌陀寺」と書かれており、少なくとも元禄年間までは「富谷山」であったことがわかる。

(24) 宗真の無縫塔（註23図「嚴誓宗真墓塔」）は室町時代のものでとされている（『隆堯法印と阿弥陀寺・浄厳院』四九頁）が、これは誤りである。この宗真の無縫塔の基礎に「施主一丸」と刻銘があり、「一丸」とは、宗真塔の隣にほとんど同じ形状の無縫塔があり、そこに「富谷三五世一丸演誓空有上人」と刻銘されている人物がそれである。

金勝 阿弥陀寺 一丸演誓空有墓塔（二〇〇四・三・二三実測）



この「一丸演誓空有」は「浄厳院文書」の正保二年六月二十八日付、江州安土浄厳院宛、知恩院役者連署書状「摺見寺文書目録Ⅱ・浄厳院文書目録」七九頁D三に「江劔金生阿弥陀寺住持演誓重科之事」とあるので、正保二年（一六四五）に在世していることが確認できる。従つて、阿弥陀寺墓地に所在する「厳誓宗真墓」は十七世紀中頃に一丸演誓によつて建立されたものであり、その頃までは「富谷山阿弥陀寺」の開山は厳誓宗真であると認識されていたことが明白である。

- (25) 中井真孝氏は「浄厳坊・阿弥陀寺本末圖」と呼ぶのがその実態から妥当であると述べているが（「浄土宗の本末図係」〈前掲書〉二六八頁、「知恩院の京都門中について」〈同書〉二九九頁）、論者は単に「浄厳坊本末圖」とするのが最もふさわしいと考える。

- (26) 「浄厳院文書」D七（「摺見寺文書目録Ⅱ・浄厳院文書目録」八三〜八四頁）。また、『由緒書』には、「起立知不申候」「開山常譽眞嚴上人、由緒知不申候」とある（『増上寺史料集』第七卷 一一七三頁）。

- (27) 永正三年という年代が正しいとすれば、この時の「永原越前守」の実名は「重秀」である。永原氏は、応永年間頃より永原村を中心に野洲郡一带を領した国人領主で、その嫡流の当主は代々「越前守」を称していた。現在常念寺には、重秀の孫「重興」の墓塔（一石五輪塔）などがあり、また、一族の「筑前守重頼」の画像も伝存している（拙稿「戦国争乱と永原氏」『野洲町史』通史編第一巻 七〇〜七二八頁）。

- (28) 元禄年間以前の常念寺住持について検証してみると、既述の二世観阿について、寺伝では七世と伝える「實蓮社忠譽上人」（代々書付）がある。これは過去帳に「七 實蓮社忠譽上人順阿真良大和尚 二月十九日」とあるのと同じ、これも観阿同様、「永禄の連判状」に「常念寺 真良 判」とあり（表一）、実在の確認ができる。その他、常念寺に所蔵する文書、或いは、境内墓地に所在する墓塔（一石五輪塔）銘、さらには一次史料ではないが、先の

〔表Ⅱ〕 常念寺歴代検証表

年.月.日	僧 侶 名	摘 要	典 拠	寺伝世代
1535(天文4). 9.13	観阿	常念寺住持	知6-100-7	2世
1550(天文19)	恩誉慶文	末寺清源寺建立	浄「元禄五改帳」	6世
1562(永禄5)	忠誉真良	末寺西念寺(紺屋町村)建立	浄「元禄五改帳」	7世
1567(永禄10). 3.3	真良	常念寺住持	知6-100-8	7世
1570~73(元亀年中)	忠誉真良	末寺浄法院建立	浄「元禄五改帳」	7世
1585(天正13)	長誉	末寺西念寺(新町村)開基	浄「元禄五改帳」	9世
1614(慶長19). 3.19	生蓮社長誉天然	〈入寂〉	墓塔銘	9世
1623(元和9). 4.14	教蓮社大誉文諦	〈入寂〉	墓塔銘	12世
1628(寛永5). 4.3	廓誉	常念寺住持	知6-76	15世
1634(寛永11). 6.5	円誉	常念寺住持	知6-95	14世
1649(慶安2). 5.22	廓誉	常念寺住持	常念寺文書	15世
1662(寛文2). 8.17	本蓮社誓誉靈山	〈入寂〉	位牌, 過去帳	18世*(1)
1697(元禄10)頃	梅誉	常念寺住持	『由緒書』	21世*(2)
1703(元禄16). 11. 19以前	梅誉	常念寺住持	『知恩院日鑑』3	21世*(2)

典拠凡例

知……知恩院文書

浄……浄厳院文書

墓塔銘……一石五輪塔銘

『知恩院日鑑』3 ……『知恩院史料集』日鑑・書簡篇 3

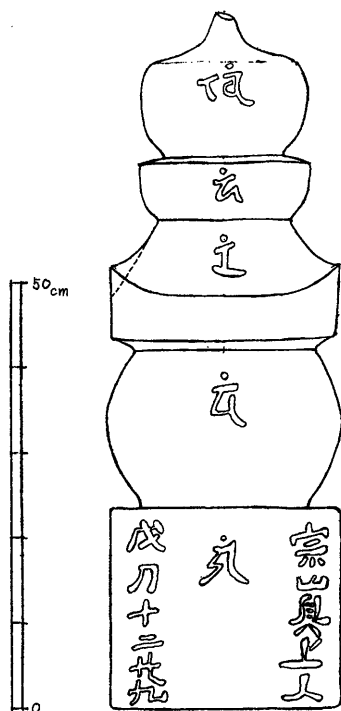
『由緒書』……『浄土宗寺院由緒書』

* (1)13世とする記録有り

* (2)22世とする記録有り

「元禄五年改帳」その他から歴代住持の在世を伝える年代を拾い上げ、既に検証したものと併せて整理してみると前頁の〔表Ⅱ〕の如くなる。

- (29) 永原 常念寺 宗真上人供養塔 (二〇〇四・三・五実測)



- (30) 『浄土宗全書』第十七卷 六二三頁。

- (31) そうであるとするならば、「常誓真嚴（嚴）」とはいかなる存在であるかということが問題となるが、『由緒書』等によつては他の浄土寺院にはその名を見いだすことは出来ず、「常誓真嚴」の实在を確認することは出来ない。ただ、常念寺に伝わる『文化七年卯月廿五日 明鏡山寺格年曆記』（「明鏡山」は常念寺の山号。文化七年＝一八一〇）には「開山 常誓真嚴上人（中略）応永三丙午年（中略）是より永正三年迄百拾壹年、七世之間西堂看住也」「永正

三丙寅年、永原越前守殿、再建起立之檀那与成、是より代々上人住職」とあるのが注目される。永正三年の永原越前守による「再建起立」（Ⅱ宗真による開基）までの間は「西堂看住」、すなわち、正式な住持職（Ⅱ「上人」）ではない僧が七代続いたというのである。そうすると、「常誓真嚴」については二つの可能性が考えられる。一つは、「常誓真嚴」は実在の僧であつて、寺伝の通りその後永正三年までは「西堂看住」であつたが、「再建起立」の宗真の名は消されてしまったということ。もう一つは、「常誓真嚴」から宗真出現までの間は全くの架空であることである。つまり、宗真の名を消し、その年代も曖昧にするために由緒が偽作されたということである。しかし、現在のところではこのどちらであるかを判断することは不可能である。

(32) 浄嚴院は現在、安土町大字慈恩寺の小字「安土」に所在するが、それにほぼ隣接して「浄念寺」という小字が存在し（安土町役場事業課の小字一覧図による）、常念寺が安土の城下に一時移転したという所伝を傍証的に裏付けている。

(33) 阿弥陀寺が浄嚴院と「両本寺」であると主張するようになったきっかけは、知恩院文書（六号文書 九四）によれば次のような経過がある。阿弥陀寺は「浄嚴坊第三代之住持嚴誓宗真」が「本寺之とりで旅所」として建立した。そして、「浄嚴坊住持并寺僧下向候て、旅所二而開山忌」を執行することとなった。ところが、天正五年浄嚴坊が安土に移り、その後は安土浄嚴院において開山忌が営まれることになり、阿弥陀寺住持も毎年この開山忌に出仕していた。そして、天正九年に阿弥陀寺が焼失し、その後本堂は再建されたが、「阿弥陀寺くり殊外不弁に罷成、常住つゝき不申候て、迷惑」していたので、「仕堂供養とて四十八日念佛を執行」すれば「諸人之志」によつて「阿弥陀寺相統」も可能であろうから、「本寺之開山忌を申請」け、「四十八日之内へ開山忌をくわへ」、「天正十七年二開山忌執行仕候故二両本寺」である、と主張するようになったのである。

(34) その結果、「元禄五年改帳」では「隆堯法印造立」と記されているのである。また、『由緒書』には「開山隆堯法印」「起立嚴譽宗真上人」と記されており、実際の開山である宗真の立場が微妙に誤魔化されている。但し、寛永年間に書き替えられた後も阿弥陀寺自身においては、既述の如く少なくとも一丸演譽の十七世紀中頃までは開山が宗真であると認識されていたのであるが(註24参照)、阿弥陀寺が浄厳院末に留まった後も、公的な場に対しては一旦書き替えられた由緒をそのまま用いたものと思われる。

なお、「阿弥陀寺寺記」(『近江栗太郡志』巻五 二〇四〜二〇五頁所収)においても、阿弥陀寺は「浄厳坊法印隆堯遁世幽棲之地」であり、「第三世嚴譽宗真上人」が「移寺東坂村、今阿弥陀寺是也、安土浄厳院亦堯公真公事跡全同当寺」であって、阿弥陀寺と浄厳院は「同祖同業」である、と記している。しかし、阿弥陀寺の山号を「金勝山」と記しているので、この「阿弥陀寺寺記」は、元禄年間以降に書かれたことは明らかである(註23参照)。従って、歴代が書き替えられた後であるので、そこには「同祖同業」と記されているのである。

また、『湖東三僧伝』もその奥書によれば、寛政六年(一七九四)に当時の阿弥陀寺住持信岡によつて著されたものである(信岡は寛政二年から同七年まで阿弥陀寺の住持であつた『浄土宗全書』第十八巻「略伝集」の内、五三七頁「信岡上人自叙伝」)。従つて、『三僧伝』も歴代が書き替えられた後に成立したものであるから、当然ながら隆堯を「開山」とし、宗真を「第三代」と呼び、以下「第八世」応譽明感に至る歴代を阿弥陀寺の住持としてあげているのである。ただ、『三僧伝』の最後に「幹事の中、宗譽浄阿上人、宝譽正琳法師なる者あり。当山に功あること住持職にも譲らざりき」と旧記に見えたり」とあるのが注目される。ここには「本末代々ノ覚」に記されていた阿弥陀寺の二世と七世があげられており、彼らは「幹事」であつたという。「幹事」とは「監寺」(本来の読みは「かんす」)のことと思われ、住持に代わつて寺内の一切の寺務を監督する役職である(中村元『佛教語大辞典』縮刷版

へ一九八一年 東京書籍」一九〇頁）。歴代が書き替えられた後においても、本来の住持を「幹事（監寺）」として記録に留めたのであろうと思われる。なお、（註44）後段参照。

（35） 但し、常念寺も争論には敗れて浄厳院の末寺に留まったので、「代々書付」が書かれた宝永二年当時は浄厳院末であることは示さざるを得ず、そのつじつまあわせのために、安土移転時に初めて浄厳院末となった、と記されたと考えられるのである。

（36） 『近江日野町志』 卷下 一七五—一七七頁。

（37） 御影堂法然上人座像の居敷の銘（『華頂誌要』へ『浄土宗全書』第十九卷）二一八頁所載）に
奉修復法然源空上人眞影、勸進之聖浄嚴坊宗眞、施主蒲生藤兵衛尉也

文明十六^{甲辰}年三月日

于時住持當院廿一代

棟蓮社周譽（花押）

とある。

（38） 「信楽院世代」（『近江日野町志』 卷下 一九五—一九六頁）には次のようにある。

一世 嚴誉宗真 永正十五戊寅十二月廿九日七十六歳寂。

智閑君ノ請ニ因テ当院ヲ中興ス。安土金勝山ノ三世也。

二世 映誉宗玖 大永五年乙酉九月二日遷化浄厳院第四代ナリト云ヘリ。

三世 大誉義道 大宮杜氏ノ宅ニ於テ太田氏靈魂ヲ濟度ス。（以下略）

本 誉 暫住。

円誉安翁 当院ヲ退テ岡本円通寺ニ移、後大聖寺草創。

本末制度確立過程における寺伝の改竄——所謂「阿弥陀寺本末圈」諸寺院の場合——

四世 盛誉周阿 当院ヲ中野ヨリ移シ、今ノ境内再建中興也。

慶長十三年六月廿一日遷化。

(以下略)

(39) 寺伝では文龜四年(永正元〓一五〇四)と伝えているが、事実は大永三年(一五二三)以後と思われる(『近江蒲生郡志』卷三 九頁「蒲生系図」、『日本城郭体系』第十一卷へ一九八〇年 新人物往来社)二六九頁)。

(40) この「珠養」は「信楽院世代」(註38)には見あたらない。ちょうど珠養の年代にあたる三世と四世の間には歴代に数えられない住僧が二名あげられており、この頃の住持名にはやや混乱があるものと思われる。

なお、この「珠養」は、同じ「永禄の連判状」において署名している阿弥陀寺第五世文誉の跡を継いでその第六世となった「真誉珠養」のことと思われる。

(41) 長束正家と知恩寺奉誉との具体的な関係はわからないが、信楽院再興を願い出た池内弥治左衛門に宛てた知恩寺会下運乗からの極月三日付書状(『信楽院文書』へ『近江日野町志』卷下一七八―一七九頁所収)の上包に「水口之城主^(正家)長束大蔵大輔様、奥方様、京都知恩寺奉誉上人様御親縁に付、御内々御頼上候而此御寺取立相続申付」とある。

(42) 『増上寺史料集』第五卷 一四七―一四八頁。

(43) 宇高良哲「『浄土宗元禄寺院由緒書』の成立過程」(『近世関東仏教教団史の研究』) 八三四―八三五頁。

(44) 但し、この由緒改竄は、本寺知恩寺または幕府に対する、いわば体面上の措置であつたと思われる。それは、信楽院自身においては宗真の名が開山僧としてその後も伝承されていること自体がそれを物語っている。

このことは、既述の如く阿弥陀寺の開山を宗真から隆堯に書き替えた後も、十七世紀中頃までは阿弥陀寺自身においては宗真が「開祖」であると認識していたことと共通するのである(註24・34前段)。ところが、寛政年間(十八

世紀末」に信岡によって書かれた『湖東三僧伝』は、既に書き替えられた歴代は勿論、少なくとも元禄年間までは「富谷山」という山号であったのを「金勝山」と記しているのである（註23・34後段）。このようなことから、『三僧伝』に書かれた内容は、従来考えられていたよりも相当多くの部分について粉飾があると考えざるを得ないのである。従って、『三僧伝』を以て阿弥陀寺及び「阿弥陀寺本末圖」成立の過程を説明するほとんど唯一の根拠とされ通説化していることに對しては、論者は極めて疑問視せざるを得ないのであり、更なる検証を行う必要があると考えるのである。

(45) その一つの例として、これも「浄嚴坊本末圖」の有力末寺であった弘誓寺の場合を考えることが出来る。神崎郡建部の弘誓寺は、寛永の争論には直接関係しなかったが、やはり本寺浄嚴院からの自立をめぐって争い、その時に寺伝を改竄した可能性がある。同寺に伝わる「報身山弘誓寺代々」(『近江神崎郡志稿』下巻 二三四―二六三頁所収)によると、「開基 文永元年甲子二月十五日 觀音音阿和尚 古記には音阿弥とあり」とあり、また『由緒書』には「起立文永七年」「開山音阿上人」(『増上寺史料集』第七卷 一一八一頁)とある。しかし、この寺伝が正しいと仮定しても、文永年間を中心とする鎌倉中期頃に「音阿上人」によって開かれたとする寺院は『由緒書』には弘誓寺の他にはなく、従って、「音阿上人」の实在を確認することは困難である。その後、弘誓寺は戦国期に至って浄嚴坊の有力末寺となる。その経緯は明らかではないが、知恩院文書の天文と永禄の「連判状」にその名が見えており(表I)、このうち天文四年の「珠栄」は不明だが、永禄十年の「宗慶」は「弘誓寺代々」に「十世 蓮誉宗慶 文禄三年二月九日」とあるの一致する。このように弘誓寺は少なくとも十六世紀においては浄嚴坊(院)の有力末寺であったが、十七世紀になると、一時浄嚴院から自立して知恩院の直末となり、三十二ヶ寺もの末寺を持っていたようである。ところが、元禄二年(一六八九)に行われた「本寺並鉄砲改め」をきっかけに再び浄嚴院末となり、抱えていた末寺も

その半数以上が浄厳院の直末となってしまうのである（『元禄・享保の本末争論』へ『八日市市史』第三卷 五三六―五三七頁）。

ここで注目されることは、弘誓寺は戦国期には浄厳坊の末寺であつたことが明らかであるにもかかわらず、その後一旦自立したということである。すなわち、自立した時に由緒が書き替えられたのではないかということである。そして、文永年間に弘誓寺を開いたという「音阿上人」の实在が確認できないということも、常念寺の「常誓真厳」の場合と同様で、実は開山は浄厳坊の誰かであつたのを書き替えてしまつたのではないかという推測が可能となるのである。

なお、この弘誓寺は所謂「七弘誓寺」の一つと言われているが、「七弘誓寺」とは、近江湖東地方における本願寺系の真宗寺院の開創伝承であり、しかもこれは近世に入ってから創作であるとされている（今堀太逸「村落寺院の諸相」へ『本地垂迹信仰と念仏』一九九九年 法蔵館 三〇九頁）。従つて、「七弘誓寺」の伝承は、浄土宗寺院である弘誓寺の成立・発展の歴史的事実を明らかにするための資料としては、ほとんど取るに足りない伝説にすぎない。